

## 史記の世界

### 中国史の舞台

黄河のほとりに発した中国の文明は、数千年にわたって絶えることなく今日に至り、なお発展をつづけている。同じように古く、文明を形成した民族はあったが、その伝統は他の民族の侵入や圧迫によって、絶ち切られた。中国の文明をになってきた漢民族の偉大な力は、他に比較できるものがない。

しかも漢民族は、時代とともに、その居住する領域をひろげ、人口を拡大してきた。漢民族が主として占有する地域は、中国本部と呼ばれるが、その面積は全ヨーロッパに匹敵する。とくに近代に至るあゆみのなかで、あまたの少数民族を領域のなかに加え、現在の総人口は10億をこえる。これは全人類の4分1に相当する。また中国の全領域は、960万平方キロに達し、ヨーロッパの2倍に当たる。

中国史は、この広大な舞台の上に展開されるのである。

中国において最初の王朝が成立した時代は、おそらく紀元前16世紀、あるいはそれ以前のことと考えられよう。殷から周にかわり、周代の後半、前8世紀以後は春秋・戦国時代と呼ばれる。古典文明は、この時期に開始した。そして前3世紀末、秦の統一によって、ほぼ現在の中国本部をおおう統一帝国が出現した。そのあとをうけた漢は、前後400年余りにわたって君臨するが、本章で取扱われる範囲は、漢代まで、実に2000年をこえる長い期間である。

1027頃	殷から周へ
841	周の共和政治
770	周室の東遷
春秋時代	
○ 孔子 551頃～479	
403	韓魏趙3国分立
戦国時代	
221	秦、中国を統一
202	漢(前漢)統一
141	武帝即位 ～87
8	王莽、新建国 ～23
25	後漢建国 ～220
166	大秦王の使者、漢に至る
220	後漢滅亡、三国分立

## 1 古典文明の形成

中国の古典によれば、太古に三皇、ついで五帝と呼ばれる聖天子が君臨したという。もちろん、これは後世に作られた伝説であるが、その内容には古代中国の知識人が理想とした政治の形態も、うかがうことができる。とくに五帝の最後に挙げられる堯および舜は、古くから聖人の代表と仰がれてきたのであった。

堯は天子の位を舜に、舜もまたその位を禹に譲った。これが弾譲と呼ばれる帝位継承の方式である。禹は、夏という王朝を開いて王となり、その後は世襲によって王位が継承された。

夏は、中国史の上で最初の王朝とされる。近年の中国においては、夏王朝の実在を前提として、その遺跡の発見が、さかんに試みられている。そして新石器時代の後期に当たる竜山文化につながる、と見なされる遺跡も、つぎつぎに発掘された。しかし、これこそ夏の遺跡と断言できるものは、まだ確認されていない。

夏につづく王朝として伝えられる殷（商）は、その王城の跡、すなわち殷墟の発掘によって、存在が確認された。いわゆる殷墟は、河南省安陽市の西北にあり、宮殿の跡や、おびただしい数の人間や家畜を殉葬した王墓が出現して、当時の王権の大きさをしのばせる。また殷墟は、殷代後期の都あとであったが、初期から中期にかけての都あとなども、鄭州市内をはじめ、各地で発見された。

殷代には、占いに使用した亀甲や獣骨の上に文字をきざみこんだ。これが甲骨<sup>こうこつ</sup>文であり、漢字の祖形をなす。また殷代には、驚くべきほどに精巧な青銅器を制作していた。その技法は、古今に比類がない。こうした青銅器は、つぎの周代にも制作がつづけられているが、その上にきざまれた文字が金文<sup>きんぶん</sup>である。金文の解読は早くから行われ、その知識にもとづいて、甲骨文も解読に至ったものであった。

前11世紀ごろ、殷を滅ぼした周は、渭水<sup>いすい</sup>のほとり、いまの西安市に近い鎬京<sup>こうけい</sup>の地を都として、黄河の流域一帯、いわゆる中原の地域を支配した。その統治のために採用された封建制度は、周の王を頂点とした身分社会の秩序をととのえたものであった。のち明治時代になって、日本の学者は中世ヨーロッパのフューダリズムfeudalismを、形態がにているところから“封建”と訳し、日本史における武家支配の秩序をも、封建と名づけた。ここに用語の混乱が起こった。周の封建制度は、ヨーロッパや日本の“封建”社会とは、そもそも異質のものである。

周代、およそ 800 年は、前 770 年に都を洛陽に遷した時点をもって、前後に分けられる。すなわち都の位置によって、西周および東周と呼ばれるようになった。東周の時代はまた、春秋時代と戦国時代とに分けられる。戦国時代の始まりは、山西にあった大国「晋」が、韓・魏・趙の 3 国に分割された年、とするのが一般である。実質上、3 国の分立は前 453 年であり、3 国が周王から諸侯として認められたのが前 403 年であった。どちらの年をとるかは、歴史に対する見解の相違によって分かれている。また孔子が編集したといわれる「春秋」の記述が終わった年、前 481 年をもって区分する考えかたもある。

現代の中国では、春秋時代までを奴隷制社会、戦国時代以後を封建制社会と規定している。すなわち前 5 世紀のなかば前後、中国の社会構造に大きな変化があったことを、重視したのであった。このころから生産用具として、鉄製の農具がひろく普及し、新しい耕作法も開発されて、農業の生産力がいちじるしく向上した。これにともなって商工業もさかんになり、都市が発達する。有力な諸侯は富国強兵の政策を推進して、近隣の諸国を合わせ、いよいよ強大となって、みずから王と称した。たしかに中国は、新しい時代に移行していったわけである。

## 2 最初の統一帝国

春秋・戦国の時代に、孔子をはじめ、諸子百家と呼ばれる多くの学派があらわれ、たがいに競い合ったことは、よく知られている。今日に伝わる古典の多くも、この時代に編集された。

孔子の教えを中心に発展した儒学の学説は、のちの統一王朝によって国教とされ、中国における政治道德の基本とされた。当時、儒学に対抗して、これを批判する論陣をはったのは、墨子の教えにもとづく墨家である。

老子および荘子の説といわれる道家思想は、やがて民間の信仰とも結びつき、これを根幹として後世には道教が生まれるに至る。道教こそは、現代まで、中国の大衆にひろく普及した宗教となった。

おそらくは道家の説くところに影響され、儒学の「礼」にかわって、君主の「法」を重んじる法家があらわれた。戦国時代の七雄のうち、もともと西方の、いわば辺境に近く建国した秦は、この法家の学説を採用して、君主権力を強化し、統治組織をととのえたのであった。

前 221 年、秦は中原の六国をことごとく滅ぼし、いまの中国本部の大部分を領域とする統一帝国を樹立した。秦の統一によって、漢民族の居住する地域は、ほぼ現在と同じように確立された。そして秦王は、君主の称号として「皇帝」号を採用し、みずから始皇帝と称した。

始皇帝のもとで行われた統一の政治は、きわめて大きな意義をもっている。まず諸国の領内で行われた郡県制を、全国に及ぼして、中央集権の体制をととのえた。貨幣を統一し、あらたに通用させた半両銭の形は、長い中国や周辺諸国における貨幣の基本形となった。文字を統一して、いわゆる篆書および隸書をつくった。これも漢字の基本形となった。度量衡も統一した。いっぽうでは法家の学説にしたがって思想の統制をはかり、<sup>ふんしよこうじゅ</sup>焚書坑儒という文化の弾圧も強行した。

折から、北方のモンゴル高原では、<sup>きょうど</sup>匈奴の勢力が強大となっていた。その侵入を防ぐため、万里の長城をきずき、さらに出兵して匈奴をゴビの北方にしりぞけた。南方に対しても大軍を発し、いまのベトナム北部から、広東・広西にまたがる地域を平定した。

こうして急激な内政の改革、たびかさなる外征と土木工事は、秦の命運を早めた。秦の統一の後、わずか15年で内乱のために滅びる。しかし統一政治の基礎は、ことごとく秦の時代にきずかれたのであった。その王朝名は西方に伝わって、**China** の語源となる。

### 3 漢王朝と西域

秦のあとをうけた漢は、長安に都して統一の政治を進めたが、あらたな改革にほとんど手をつけなかった。始皇帝が敷いた軌道の上を、そのまま走った、とあってよい。しかし、そのために民生は安定に向かい、王朝そのものも前後あわせて400年の長命を保ったわけである。

よって後世、漢という王朝名は、それ自身が中国を示す語ともなった。漢民族をはじめ、漢字、漢文などの語は、長く王朝の名を伝えて今日に至っている。

さて漢は前2世紀後半、武帝の代に至って、中央集権の体制を確立するとともに、大いに領域を拡大した。南は、秦の滅亡後に独立の国を建てていた南越を滅ぼし、ベトナム北部に及ぶ領域を回復した。東は朝鮮国を滅ぼして、楽浪郡などの4郡を置いた。また北は、しばしば匈奴に対して攻撃を加え、甘肅の地域を領域に組み入れた。

さらに西方の対しては、張騫をつかわして西域に達する道をひらき、つづいて大軍を発し、アーリヤ人のオアシス国家群を服属させた。これより西域をへて、中国と西方世界との交易がさかんになり、いわゆるシルクロードの繁栄がもたらされる。

それにしても、今日なお地上の往来が容易ではない西域の砂漠のなかを、何万という大軍が戦闘しながら往復したのである。皇帝の命令のもとでは、おび

ただしい数の武装兵団が、道なき道を進軍しなければならなかった。その壮舉に驚くと同時に絶対者の権力にも恐ろしさを感じるのであろう。

この武帝の時代に、司馬遷が「史記」を編述したことも、とくに注目すべきであろう。紀伝体、すなわち本紀と列伝、また書と表などを立てて歴史を記述する方式は、この後も長く修史の基本となった。表、すなわち年表という形式も、司馬遷の創案である。また司馬遷は、太古から筆を起こしているが、最後は漢代、武帝の時代にまで及んでいる。古代史のみでなく、現代史を重んじる歴史感覚を、司馬遷はそなえていたことを、とくに強調したい。

さて1世紀初め、外戚の王莽による中断をはさんで、前後の王朝をわが国では前漢・後漢とよぶ。中国では西漢・東漢と称しているが、これは後の王朝が東方の洛陽を都としたことによるものである。

後漢の時代にも、西域の経営には力がそそがれた。西域から発せられた使者は、ローマ帝国の東境にまで達している。また西方から、インド洋をへて中国に至る海洋の道も、主としてギリシア系の商人により、開かれていた。2世紀にはローマ皇帝（大秦王）の使者と称する者が、ヴェトナムをへて中国に達している。